

## カルロ・クリヴェッリ作 《受胎告知》

— "LIBERTAS ECCLESIASTICA" 祝祭行列との関連から —

(美術教育講座) 上原真依

### A Study of Carlo Crivelli's *The Annunciation* : With the reference to the festival procession of "LIBERTAS ECCLESIASTICA"

Mai UEHARA

(平成25年7月24日受理)

#### はじめに

ヴェネツィア出身の画家カルロ・クリヴェッリ (Carlo Crivelli, 1430/35-1494?) は15世紀後半、イタリア中部のマルケ地方で多数の祭壇画を制作した。現在、ロンドンのナショナル・ギャラリーが所蔵する《受胎告知》(図1)も、クリヴェッリが1486年マルケ地方の町アスコリ・ピチエーノのために制作した祭壇画とされている。非常に豪華で繊細な装飾に満ちた本作品は、金地背景に聖人を配す多翼祭壇画を制作していたクリヴェッリの従来の様式からも、受胎告知というキリスト教において重要な物語の図像伝統からも逸脱した作品である。

一般的に、乙女マリアのもとに神の子を身籠ることを告げに大天使ガブリエルが現れるというこの主題においては、背景に建物や庭などを描きこむことが多い。だが、同時代の作品に見られるように、その舞台は主にマリアの家の中(図2)か、中庭やテラス(図3)が殆どで、精密に描写された町の中で、しかも家の外からお告げが行われるような作例は、管見の限り他に確認できない。また、大天使とマリアの間に別の人物が登場するような作例も殆ど見つけられないのである<sup>1</sup>。何故クリヴェッリは《受胎告知》において、神聖なお告げを、入り組んだ町の中で、しかも窓越しに実現することに



図2 サンドロ・ボッティチェッリ、《受胎告知》、1489-90年頃、板にテンペラ、150×156cm、フィレンツェ、ウフィッツィ美術館



図3 レオナルド・ダ・ヴィンチ、《受胎告知》、1472-75年頃、板に油彩とテンペラ、98×217cm、フィレンツェ、ウフィッツィ美術館

<sup>1</sup> 僅かな例としてベネデット・ボンフィッリの《受胎告知》(1450-53年、ウンブリア国立美術館)があげられる。この作品では、天使とマリアの間に福音記者聖ルカが見られるが、聖ルカはお告げの場面を記録しており、天使やマリアからは見えない存在として描かれていると考えられる。





図1 カルロ・クリヴェッリ、《受胎告知》、1486年、板にテンペラ（カンヴァスに転移）、207×146cm、ロンドン、ナショナル・ギャラリー © The National Gallery, London.



したのか。筆者は、この理由にはアスコリ・ピチェーノの歴史的事実と、作品の展示状況、そして地域独特の民俗的とも言える信仰が関与していたと考える。以下の議論では、まず本作品がいかに町の歴史的事実に関与しているかという点を踏まえた上で、展示場所および信者たちが作品を見た状況を確認し、作品における舞台装置の重要性を示す。さらに、当時崇敬熱が高まりつつあったマルケ地方の巡礼地と、作品特有のモチーフといえる窓越しのお告げとの関連性を探りたい。

## 第1章 制作背景

先行研究でも指摘されてきたように、《受胎告知》はアスコリ・ピチェーノの重要な歴史的事実に関連して制作された。その根拠は、作品前景の台座部分にラテン語で刻まれた **LIBERTAS ECCLESIASTICA** にある<sup>2</sup>。  
リベルタース エククレシアースティカ  
**LIBERTAS ECCLESIASTICA**とは、直訳すると「教会の自由」であり、1482年にアスコリ・ピチェーノが実質的に教皇から獲得した、部分的な自治権のことを意味する。作品の制作背景を知るには、まずこの“**LIBERTAS ECCLESIASTICA**”とは何だったのか、そして町にとってどれほど重要な意味を持っていたのかを明らかにする必要があるだろう。

### 1-1. “LIBERTAS ECCLESIASTICA”とは

アスコリ・ピチェーノはマルケ地方南部、トロント川沿いに位置する小都市である。ナポリ王国と教皇領の境界付近の都市であったため、かつてはナポリ王国に占領された時期もあったが、カルロ・クリヴェッリが活動した15世紀後半のアスコリ・ピチェーノは教皇領に属し

ていた<sup>3</sup>。

教皇領にとって、ナポリ王国との境界付近に位置するアスコリ・ピチェーノは戦略上重要な町であり、そのため貨幣の鑄造権や周辺地域にある城塞の管理権<sup>4</sup>などの特権がすでに与えられていた。また行政に関しても、すでに“**LIBERTAS ECCLESIASTICA**”の承認までに、都市独自の機関として議会や長老会を有し、1377年に町の行政に関する法規を制定するなど、ある程度の実質的な自治権を得ていた。しかしこれらの機関の決定事項は、教皇庁から派遣される代理人の意に沿う必要があったことに加えて、課税額の決定権や収税権、他国との戦争など外交上の重要事項の決定権、軍司令官の指名権、裁判に関する決定権は、教皇庁の代理人と財産管理人が握っており、これらの点で依然として教皇の管理下に置かれていた。

そこでアスコリ・ピチェーノの人々は、さらなる特権を得ることで、より独立した都市国家になることを求めるようになった。この要求の背景には、アスコリ・ピチェーノの周辺ではすでに同等の権利を認められた都市があったことも関係しているだろう。特に長年のライバル都市であったフェルモが、すでに上記のような特権を獲得していた事実は、アスコリ・ピチェーノの市民に対抗心を抱かせ、自治権の拡大を求める気持ちに拍車をかけていたようである<sup>5</sup>。なぜなら、1-2でも言及するアスコリ・ピチェーノの司教プロスペロ・カッファレリが長老会に送った、自治権承認に関する書簡の中で、司教は次のように述べているからである。  
「あなた方の件はついにうまく収まりました。まず承認

<sup>2</sup> 《受胎告知》と **LIBERTAS ECCLESIASTICA** の関連性を指摘した、主な先行研究は次の通り。M. Davies, *Carlo Crivelli: The Annunciation*, London: National Gallery Publications, 1947; G. Fabiani, *Ascoli nel Quattrocento: artisti monumenti e opere d'arte*, vol. 2, Ascoli Piceno: Società Tipolitografia Editrice, 1951, pp. 155-166 (以下、Fabiani, *op. cit.*, (1951).とする) ; P. Zampetti, *Carlo Crivelli*, Firenze: Nardini Editore, 1986, pp. 34, 284-286; G. Gagliardi, *L'Annunciazione di Carlo Crivelli ad Ascoli* (catalogo della mostra, Ascoli Piceno, 30 Marzo-30 Giugno 1996), Ascoli Piceno: Giannino e Giuseppe Gagliardi Editori, 1996; T. Golsenne, “L'Annonciation de Carlo Crivelli et le problème de l'ornement”, *Studiolo: Revue de l'académie de France à Rome*, no.1 (2002), pp. 149-176; R. Lightbown, *Carlo Crivelli*, New Haven & London: Yale University, 2004, pp. 323-344.

<sup>3</sup> 1404年、ナポリ王国がアスコリ・ピチェーノの領主権を獲得するが、圧政と虐殺のために国は荒廃し1426年教皇軍の侵攻で、再び教皇領に入った。G. Fabiani, *Ascoli nel Quattrocento: vita pubblica e privata*, Ascoli Piceno: Società Tipolitografia Editrice, 1950, pp. 38-43. (以下、Fabiani, *op. cit.*, (1950).とする)

<sup>4</sup> *Ibid.*, pp. 14-16.

<sup>5</sup> フェルモは長年、アスコリ・ピチェーノと、トロント川河口の港町ポルト・ダスコリの利権をめぐって対立していた。1446年3月、教皇エウゲニウス4世は収税権などの特権の一部をフェルモに与えた。G. De Minicis, *Cronache della città di Fermo*, Firenze: Cellini, 1870, p. 280.

の件に関して（申し上げます）。私たちの教皇陛下は、私たちの望みを喜んで聞き入れてくださり、寛大にもフェルモや他のマルケの都市も享受している、かの免除と恩恵を許してくださいました<sup>6)</sup>（括弧内および傍線部筆者）

ところでアスコリ・ピチェーノでは、上記のような教皇領内で得た自治権を“LIBERTAS ECCLESIASTICA”と呼んだが、これはその内容に即して検討すると、必ずしも適切な表現とは言えない。というのも、都市が行政・司法における自治権を得るためには、毎年多額の金銭を納めることが条件になっていたからである。つまり教皇にとっては、一時的に都市に関する直接支配権を放棄する代償として、毎年収入を得られるシステムであった。新たな財源を手に入れる機会であったにもかかわらず、教皇がアスコリ・ピチェーノからの再三の要求に応じなかったのは、町がナポリ王国との境界線近くに位置し、ナポリ王との関係も概ね良好であったことを憂慮したためであろう。ナポリ王と緊張状態に陥っていた教皇にとって、国境沿いの町の軍事決定権を手放すことはあまり望ましくなかったのである<sup>7)</sup>。

“LIBERTAS ECCLESIASTICA”は1482年の承認後に確認できる呼び名であり、交渉の際の書簡では「自由 liberta」、「恩恵 gratia」や「免除 jnmunita」とだけ言われていた<sup>8)</sup>。また“LIBERTAS ECCLESIASTICA”という言葉が、アスコリ・ピチェーノ以外の都市で 사용되는例もそれほど多くない<sup>9)</sup>。この言葉は、教皇より承

認された条件付き自治権を有する都市を指して、承認後にアスコリ・ピチェーノでしばしば使われるようになった、少々大仰でもある言い回しであった。

## 1-2. “LIBERTAS ECCLESIASTICA”承認の経緯

これまで見てきたように、経済的な発展を遂げ、すでに教皇より部分的な自治権を得ていたアスコリ・ピチェーノはさらなる自治権の拡大を求めていたが、教皇はすぐには承認しなかった。それでは、所謂“LIBERTAS ECCLESIASTICA”はどのような経緯で承認に至ったのであろうか<sup>10)</sup>。実はこの自治権獲得の経緯こそが、《受胎告知》の内容を読み解く重要な鍵となっている。

1482年、アスコリ・ピチェーノはローマ教皇シクストゥス4世のもとに“LIBERTAS ECCLESIASTICA”承認の交渉を進めるため、2人の使節を派遣した<sup>11)</sup>。この使節は2月16日には教皇と面会していたが、教皇は“LIBERTAS ECCLESIASTICA”交渉の為にアスコリ・ピチェーノに代理人を派遣することがふさわしいと返事をしただけであった<sup>12)</sup>。そして翌月、教皇の交渉代理人として、カメリーノの司教シルヴェストロ・デル・ラウロを選出するとともに、要求を詳細に報告するため町の要人14名を直ちにローマに派遣するように命じている<sup>13)</sup>。

数日後、教皇は代理人として選出したカメリーノの司教を直ちに派遣することを決め、3月22日付の勅書で、アスコリ・ピチェーノの長老会に、カメリーノの司

<sup>6)</sup> 1482年6月14日付、ローマにいたアスコリ・ピチェーノ司教カッフアレリがアスコリ・ピチェーノ長老会に送った書簡。“La cosa vostra è stata infine ben conclusa: jo primis quanto alla parte del beneplacito: N.S. se contentato exaudire el vostro desiderio, et liberamente concederve questa jnmunita et gratia come gode Fermo et laltre terre della Marcha...”（傍線部筆者）Fabiani, *op. cit.*, (1950), pp. 388-389.

<sup>7)</sup> 1482年4月半ば、ナポリ王は教皇領に進軍している。講和条約は同年12月12日に結ばれた。R. Giorgi, *Venti anni di democrazia in Ascoli*, Fermo: La Rapida, 1971, pp. 30-35.

<sup>8)</sup> 「免除 jnmunita」「恩恵 gratia」については註6の引用を参照のこと。「自由 liberta」は、1482年7月20日付、マルケ地方教皇代理人からアスコリ・ピチェーノ長老会に送った書簡で記されている。Fabiani, *op. cit.*, (1950), p. 389.

<sup>9)</sup> 例えば1463年に教皇領となったマルケ地方北部の町ファーノでは、1491年頃に“LIBERTAS ECCLESIASTICA”の銘と教皇インノケンティウス8世の紋章を刻んだ門が作られた。ただしインノケンティウス8世の紋章はその後教皇アレクサンドル6世の頃に削られ、現在は確認できない。

<sup>10)</sup> 承認の経緯については以下の文献を参照した。Fabiani, *op. cit.*, (1950), pp. 117-125; Giorgi, *op. cit.*, pp. 37-41. 自治権承認に関する教皇との交渉過程は、4通のみ確認されているアスコリ・ピチェーノ長老会宛の教皇勅書より知ることができる。勅書は以下に引用されているものを参照した。Fabiani, *op. cit.*, (1950), pp. 386-387.

<sup>11)</sup> F. A. Marcucci, *Saggio delle cose ascolane e de' vescovi di ascolani nel piceno*, Teramo, 1766, (ris. Bologna: Arnaldo Forni Editore, 1984), p. 350.

<sup>12)</sup> 1482年2月16日付アスコリ・ピチェーノ長老会への教皇勅書より。Fabiani, *op. cit.*, (1950), p. 386.

<sup>13)</sup> 1482年3月13日付アスコリ・ピチェーノ長老会への教皇勅書より。Ibid., p. 386. ただしローマへの要人派遣命令は、3月22日付の勅書で取り消されている。

教が町へ向かったことを告げ、司教の指示に従い承認に関してそれ以上の議論をしないようにと勧告した<sup>14</sup>。

この勅書がアスコリ・ピチェーノに到着したのは、ちょうど3月25日、すなわち聖書において乙女マリアが大天使ガブリエルより神の子を身籠ることを告げられた日（受胎告知の祝日）であった。しかし勅書を読んだ行政官らは、“LIBERTAS ECCLESIASTICA”が認可され、その知らせのためにカメリーノの司教がやってくると誤解する。この誤解が意図的なものだったかどうかは分からないが、なかなか積極的に交渉に応じない教皇に対して、強引に承認を得ようとした可能性は高いだろう。

自治権獲得の誤報は市民にも知らされ、瞬く間に町中が喜びに沸いた。市民は熱狂の内に、教皇庁の代理人や財産管理人までも町から追放してしまう。カメリーノの司教がアスコリ・ピチェーノに到着した時にも、承認を祝ってお祭り騒ぎの最中だった市民らは、司教に敬意を払うことなく追い返してしまった<sup>15</sup>。

もちろん誤解を認められない教皇は、長老会に対し、教皇の意志を無視して町に偽りの知らせを出して市民を虚しく喜ばせたことと、教皇庁の代理人やカメリーノの司教を無礼な態度で追い出したことを咎め、直ちに町を元の状態に戻すように通達している<sup>16</sup>。これを受けたアスコリ・ピチェーノは、交渉役としてコンヴェンツァル・フランシスコ会修道士ジャコモ・ジョヴァンニーニをローマへ派遣した<sup>17</sup>。

教皇とすでに面識があり<sup>18</sup>、さらに同じ修道会でもあったジョヴァンニーニは、教皇の甥にして教皇軍の総司令官だったジローラモ・リアーリオの協力を得、教皇を調停の席につかせることに成功した。教皇はアスコリ・ピチェーノの弁解を聞き入れ、突然の“LIBERTAS

ECCLESIASTICA”宣言によって支払われなかった税金について、教皇庁財務局と調整するために町からの使節を受け入れることにした。ジローラモ・リアーリオはできる限り早く金を集めてローマに送ることが「重大な」過ちを挽回する唯一の方策であり、自治権認可の勅書のためにはすぐに金を渡すことが必要だと告げている<sup>19</sup>。これを受けてアスコリ・ピチェーノはただちに2人の使節をローマに派遣し、530ドゥカートを司教プロスペーロ・カッファレリに届けさせた。カッファレリはアスコリ・ピチェーノの司教であったが、教皇庁の高官でもあったため、ちょうど教皇庁に滞在していた。

酷暑やペストの影響に加えて、教皇と戦争中であったナポリ王フェルディナンド2世がローマの城壁にまで迫っていたことから、交渉は数週間延期されたものの、同年6月、カッファレリとアスコリ・ピチェーノからの使節が懇願した結果、ついに教皇シクストゥス4世はアスコリ・ピチェーノが「フェルモや他のマルケの都市と同じ免除と恩恵」を獲得することを認可した。まだいくつかの行政及び財政上の問題点は残っていたため、カッファレリは、教皇庁財務局によって課せられた年間3000ドゥカートの支払いを滞りなく済ませることを、長老会に助言している<sup>20</sup>。その後、残金がいつ支払われたかは分かっていないが、教皇は1482年7月18日付の勅書で、アスコリ・ピチェーノの自治権、所謂“LIBERTAS ECCLESIASTICA”を正式に承認した<sup>21</sup>。

このように条件付きの自治権“LIBERTAS ECCLESIASTICA”は、3月25日に承認されたと誤解され、教皇との交渉を経て7月に正式に承認された。正式承認は7月だったにも関わらず、アスコリ・ピチェーノでは3月25日が“LIBERTAS ECCLESIASTICA”

<sup>14</sup> 1482年3月22日付アスコリ・ピチェーノ長老会への教皇勅書より。 *Ibid.*, pp. 386-387.

<sup>15</sup> 1482年3月30日付アスコリ・ピチェーノ長老会への教皇勅書より。 *Ibid.*, p. 387.

<sup>16</sup> 1482年3月30日付アスコリ・ピチェーノ長老会への教皇勅書より。 *Ibid.*, p. 387.

<sup>17</sup> ジャコモ・ジョヴァンニーニ修道士については次の文献を参照。G. Fabiani, “Azione politico-sociale dei religiosi in Ascoli nel sec.XV”, *Studi Francescani*, Anno 19, no.3-4 (1947), pp. 174-177. (以下、Fabiani, *op. cit.*, (1947).とする。)

<sup>18</sup> ジョヴァンニーニ修道士は、1471年、教皇シクストゥス4世の就任の際にアスコリ・ピチェーノの使節としてローマ入りしていた。 *Ibid.*, p.175.

<sup>19</sup> Fabiani, *op. cit.*, (1950), pp. 387-388.

<sup>20</sup> 1482年6月14日付、司教カッファレリがアスコリ・ピチェーノ長老会に送った書簡より。註6も参照のこと。Fabiani, *op. cit.*, (1950), pp. 388-389.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p.379.

を獲得した日と考えられ、重要視された。このことは町の年代記が次のように記していることから確認できる。「1482年、3月25日、ちょうどこの日にアスコリの都市の自由が教皇シクストゥス4世によって与えられ認可された<sup>22</sup>。」こうしてアスコリ・ピチェーノはフェルモと同様に、教皇領下でありながら独自の政体をまとめ上げ、城塞の司令官を任命することが可能になった<sup>23</sup>。

交渉の末獲得した“LIBERTAS ECCLESIASTICA”を記念し、アスコリ・ピチェーノでは複数の美術品が作られることになった<sup>24</sup>。その1つがカルロ・クリヴェッリの《受胎告知》である。クリヴェッリは、勅書を受け取った日付、つまり受胎告知の祝日に因んで、聖書における乙女マリアへの受胎告知を描き、かつ“LIBERTAS ECCLESIASTICA”を取り上げるという主題に取り組んだ。次章では《受胎告知》の内容を見ていき、画家がどのようにこの主題に取り組んだのかを確認していこう。

## 第2章 《受胎告知》と“LIBERTAS ECCLESIASTICA”

“LIBERTAS ECCLESIASTICA”から4年後の1486年、カルロ・クリヴェッリは《受胎告知》を制作した。作品の契約書や領収書は見つかっていないが、作者と制作年は、画面右側に描かれた乙女マリアの部屋の、左の柱に OPUS CAROLI CRIVELLI/VENETI のサイン、右の柱に 1486 と制作年が刻まれていることから明らかである。下部石段の蹴上げ部分には、“LIBERTAS ECCLESIASTICA”の銘が金文字で刻まれ、それを挟んで左よりアスコリ・ピチェーノの司教プロスペロ・カッファレッリ、教皇インノケンティウス8世<sup>25</sup>、そして

アスコリ・ピチェーノの盾形紋章が描かれている。さて、クリヴェッリはどのようにしてアスコリ・ピチェーノにおける重要な歴史的イベントを、《受胎告知》の中で表したのだろうか。本章では作品の詳細にあたりつつ、“LIBERTAS ECCLESIASTICA”を可視化した手法を中心に作品を見ていこう。

画面右側、乙女マリアは家の中で、両手を交差させて祈祷台を前にして跪いている。部屋の内部には豪華な刺繍の施された大きなクッションや白いシーツ、壁に備え付けられた棚には燭台、皿、本、瓶などの日用品が見える。二階のバルコニーには幾何学模様が細かく織り込まれた絨毯が掛けられ、その横では孔雀が悠々と羽を休めている。こういった静物や孔雀における細かな描写は、フランドル絵画における細密描写を思わせるほどである<sup>26</sup>。画面奥では雲間から光線が出現し、その周りを小さな金色のケルビムが円盤状に取り囲んでいる。天からの強烈な光線は大きく右手前方向に伸び、マリアの部屋の中へと続いている。まるで壁を貫いているかのような光線も、他の作例には見られない表現である。光線の先では聖霊の鳩が乙女マリアに向かっている。家の外の道には大天使ガブリエルが百合の花を左手にして跪き、厳めしい面持ちで、窓越しに乙女マリアと向かい合っている。天使の翼は羽の一本一本が金色の筋で強調され、まるで金属のような質感で、放射状に広がっている。ブローード織りの服に付いたアカンサスの葉をかたどった肩章もまた金属質を思わせる。

乙女マリア、大天使ガブリエル、そして天から下る聖霊は受胎告知という主題には欠かせない。しかしこの《受胎告知》では、一見この主題とは関係のないようなモチーフも挿入されている。まず目に入るのが、天使

<sup>22</sup> “1482 25 martii, libertas civitatis Asculane fuit data et concessa tempore Sixti pontificis quarti” (Cronaca Ascolana, f.27v) A. Salvi, *Cronaca ascolana dal 1345 al 1523*, Ascoli Piceno: Giannino e Giuseppe Gagliardi Editori, 1993, p. 41.

<sup>23</sup> この自治権“LIBERTAS ECCLESIASTICA”は1502年まで続いた。Marcucci, *op. cit.*, p. 350.

<sup>24</sup> クリヴェッリの《受胎告知》以外では、次の作品が“LIBERTAS ECCLESIASTICA”を記念したものとして知られている。ピエトロ・アレマンノ、《受胎告知》1484年、アスコリ・ピチェーノ絵画館蔵（アスコリ・ピチェーノ長老会メンバーが議会宮殿内の礼拝堂のために注文）。作者不詳、《善き政体》、1484年、アスコリ・ピチェーノ、カピターニ・デル・ポーポロ宮殿蔵（アスコリ・ピチェーノ長老会メンバーが議会宮殿内の法廷のために注文）。また、1482年にはカピターニ・デル・ポーポロ宮殿の塔に LIBERTAS と刻まれた新しい鐘が取り付けられている。

<sup>25</sup> “LIBERTAS ECCLESIASTICA”認可時の教皇シクストゥス4世は、1484年8月に亡くなったため、1486年時点での教皇インノケンティウス8世の紋章が描かれたと考えられる。

<sup>26</sup> クリヴェッリと北方絵画との関係については、以下の論文で、クリヴェッリが版画から影響を受けた可能性が指摘されている。M. Heimbürger, “Carlo Crivelli e una sua probabile fonte d’ispirazione”, *Paragone*, no. 543-545 (Maggio-Luglio 1995), pp. 3-15.



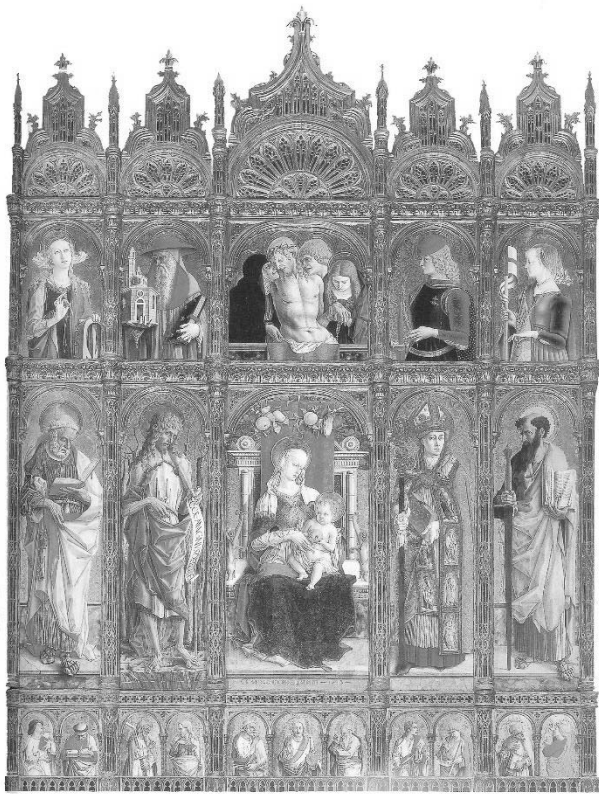


図4 カルロ・クリヴェッリ、  
《アスコリ・ピチェーノ祭壇画》、1473年、  
テンペラ、約290×280cm、アスコリ・ピチェーノ、  
司教座大聖堂

の傍らで跪いている人物である。司教冠を戴いたこの人物は、髭も生えていない若者の顔つきで、アスコリ・ピチェーノの町の模型を手にし、穏やかに天使の方を向いている。クリヴェッリは1473年にもアスコリ・ピチェーノの大聖堂の為に制作した《アスコリ・ピチェーノ祭壇画》(図4、図5)において、同じ人物を描いている。この司教姿の若者は、2世紀後半に教皇マルケルス1世により司教に任じられ、アスコリ・ピチェーノで布教活動に励み、異教徒であった町の多くの人々を改宗へと導いたことで知られていたアスコリ・ピチェーノの守護聖人聖エミディウスである。このことは、町の模型を持っていることに加えて、若くして異教徒の手によって殉教したために若者の姿で描かれていることから特定できる<sup>27</sup>。アスコリ・ピチェーノの守護聖人と彼が持つ町の模型が、受胎告知の場面に挿入されることで、この絵が同地の重要な歴史的の事件に関連し



図5 聖エミディウス  
(図4部分)

ていることが暗示されている。手前から奥に向かう道の階段の前では、左側には修道服をまとった人物が見える。階段の奥のアーチの下には、男性が左手で陽光を避けながら空を見上げている。アーチの奥左側には、左端に頭上に水瓶を載せ紡錘を手にした女性、中央には二人の女性と、壁の前で話をしている2人の男性が見える。左の建物の上方には複数の鳩があり、止まり木で翼を休めたり、飛びたとうとしている。建物の穴から身体を手前に出している鳩がいることから、この建物が鳩舎であることに気づくだろう。そして注目すべきは、アーチの上のバルコニーで、政府高官を思わせる黒服の人物が、手紙らしきものを読んでいることである。開いたままの本が欄干にあることから、読書をしていた彼のもとに、右方に控えている男が持ってきた手紙を、彼は読んでいると推測できる。そしてその男の存在によって、欄干の上にある鳥籠の中には、手紙を運んできた伝書鳩が入れられていることが暗示される。左の鳩舎に数羽の鳩がいることで、この暗示にたどり着くことは難しい。これらは聖書におけるお告げとは全く関係がない。しかしアーチ上の人物が手紙を読んでいる日が、前景で展開される乙女マリアへのお告げを記念する祝日、つまり3月25日であること、さらに台座に“LIBERTAS ECCLESIASTICA”の銘が刻まれていることから、この手紙がアスコリ・ピチェーノに届いた“LIBERTAS ECCLESIASTICA”を知らせる手紙を意味していることは容易に想像がつくだろう。アスコリ・

<sup>27</sup> 聖エミディウスの生涯については、以下の文献を参照。A. Galli, *Sant'Emidio: la sua vera immagine*, Ascoli Piceno: Falco, 2004, pp. 15-19. なお現在、聖エミディウスは地震災害からの守護聖人として知られているが、これは1703年に中部イタリアで起こった大地震(奇跡的にアスコリ・ピチェーノでは被害はなかった)の後に確認できる記述である。Ibid., p. 91.

ピチェーノの建築物ではあまり例のない古典的なローマ風のアーチ上に<sup>28</sup>、“LIBERTAS ECCLESIASTICA”を説明する重要な人物を配置したことは鑑賞者の注意を引きつける有効な手段であったと言えよう。

前景ではお告げという聖書の出来事が描かれている一方で、後景では「受胎告知の祝日」に、教皇から町の自治権の承認を「告げた」とされた出来事が語られている。時、場所、内容の異なる二つの出来事を「受胎告知の祝日」「鳩」「告知」という共通要素によって結びつけ、それぞれの場面を描き出しているのである。また、前景でお告げを受けるマリアの家の二階には、絨毯が掛けられ鉢植えの植物が置かれているが、後景の告知の場となったアーチ上のバルコニーにも、樹の種類や絨毯の様子は異なるものの、鉢植えの植物と絨毯が繰り返し描かれている。特に、赤く豪華な絨毯は観者の目を引きつけ、重大なお告げの場となるアーチ上に注意を喚起しているかのようである。

聖書の物語と歴史的事実をつなぎ合わせたのは、その内容の共通点だけではない。クリヴェッリは、それまであまり見せることのなかった遠近法を利用した奥行きのある空間を描くことで、アスコリ・ピチェーノ自治権承認の場面とマリアへのお告げをうまく組み合わせることに成功している<sup>29</sup>。

観者が作品の前に立つと、連続する規則的な道路のタイルと両側の建物のコーニスによって、奥へと視線が移動し、続く階段により上部に向かう。一番奥では、二人の男性が立ち止まり話し込んでいる。そしてその手前、アーチより手前に目をやると、一人の男性が手をかざして空を見上げている。彼の視線を追うと、観者の視線は建物の軒蛇腹に沿って手前に誘導され、乙女マリアへ向かう聖霊の光を見ることとなる。まるで建物に穴をあけているかのような強烈で超自然的な光線は、神からマリアへのお告げの絶対性を思わせると同時に、

絶対的であるべき教皇からの告知をも暗示している。聖霊の光線に沿って、その光源の方向に目を移すと、アーチの上に手紙を運んできた男と、手紙を読む政府高官らしき人物が見える。つまり何かを待っているように話し込んでいる人、お告げに気づく人、“LIBERTAS ECCLESIASTICA”の承認の知らせを読む人物というように1482年のアスコリ・ピチェーノにおける歴史的事件の経緯が、画面奥で説明されていることになる。

さて、前景に視線を戻すと、観者の目の前で聖エミディウスが天使の向こうで跪いている。一方、手前の天使は、聖エミディウスに気を取られることなく乙女マリアの方を向いており、マリアと天使はその表情と体の向きから、後景での出来事から独立しているかのようである。このようにクリヴェッリは、奥行きを演出した空間内に、歴史上の出来事と聖書の物語をそれぞれ後景と前景に配置することで、遠近法に従う視線の動きによって、両景を巧みに結び付けている。二つの異なる出来事を、共通要素によって結びつけると同時に、奥行きある空間内で、自然と歴史上の出来事に観者の目が向くようにすることで、クリヴェッリは《受胎告知》とアスコリ・ピチェーノとの関係性を強調したのである。

### 第3章 設置場所 — 《受胎告知》と祝祭行列—

ただし、前章で検証したような聖書と同時代の歴史的事実のつながりは、当然のことながら、作品を観る者がその出来事を知っていなければ伝わらない。それでは、《受胎告知》を目にする場は一体どのようなものだったのだろうか。

《受胎告知》が当初、どのように設置されていたのかを伝える資料は見つかっていない。《受胎告知》の記録が初めて確認できるのは1571年のことで、アスコリ・ピチェーノにあるサンティッシマ・アンヌンツィアータ

<sup>28</sup> アスコリ・ピチェーノには現在確認できる限り、このようなローマ風の門は確認できない。ポーヴェロはアスコリの西部にある古代ローマのジェミーナ門との類似を指摘しているが、ジェミーナ門は1824年の発掘の際に発見されたため、クリヴェッリが参考にした可能性は低い。A. Bovero, *Tutta la pittura del Crivelli*, Milano: Rizzoli Editore, 1961, p. 39.

<sup>29</sup> クリヴェッリはもっぱら多翼祭壇画を制作していたこともあり、遠近法の利用が顕著な大画面作品は他に確認できない。ただし《マッサ・フェルマーナ祭壇画》のように多翼祭壇画のプレデッラにおいては、しばしば三次元空間を伴うような聖書の場面が確認できる。ザノービニ・レオーニは《受胎告知》における遠近法の利用について分析し、その構図を立体的に再現した上で場面の奥行きや鑑賞者との位置関係を復元した。T. Zanobini Leoni, Carlo Crivelli, “L’Annunciazione della National Gallery di Londra”, *Critica d’arte*, II, 1984, p. 95.



聖堂にあると記録されている<sup>30</sup>。イタリア語で「いと聖なるお告げを受けたもの」を意味するサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂は、アスコリ・ピチェーノの町の南西、小高いアンヌンツィアータの丘に建つ聖堂である。現在、隣接する修道院はカメリーノ大学建築学部として使われているが、聖堂は使用されていない<sup>31</sup>（図6、図7）。サンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂に関しては、町の年代記に次のように記されている。



図6 現在のサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂 外観（筆者撮影）

「1482年4月10日、アウグスチノ会である聖マリア女子修道会がアンヌンツィアータ・デッレ・グロッテの土地から移された。この地は、かの日〔すなわち受胎告知の日に上述の自由が知らされ公示されたため〕を祝うために、厳律フランシスコ会の修道士達に与えられた。そして当局者らや、町全域及びアスコリ周辺の村に住む人々、町のすべての同業組合が、毎年、かの教会暦による受胎告知の日に蠟燭を献げ、上記の自由のことをいつまでも覚えておくために、（聖堂を）訪ねる、という法が定められた<sup>32</sup>」（丸括弧内筆者）



図7 現在のサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂内部（筆者撮影）

アスコリ・ピチェーノでは、受胎告知の祝日に、同地が教皇より承認された「自由」を祝うために、サンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂へ蠟燭を持って訪れることが決められた。受胎告知の祝祭の詳しい内容に関しては、翌年1483年3月16日の議会で「自由の獲得を記念して受胎告知の日に素晴らしき乙女マリアに払われるべき敬意について」審議された結果、盛大な祝祭を執り行うことが決定している。

議会でピエールサンテ・ディ・アンドレア・アンゲルッ

<sup>30</sup> 9月27日付ピツィオ・ファルコニエーリの遺言書において、ピツィオが「アスコリの町のサンタ・マリア・アンヌンツィアータ聖堂の中、ヴェネツィアのカルロ・クリヴェッリの手により描かれたお告げの祭壇画の前に（“in ecclesia sante Marie Annunziata Civitatis Asculi, ante altare Annunziata, pictum manu condam Caroli Crivelli Veneti.”）埋葬されることを望み、その祭壇画のまわりに祭壇、もしくは礼拝所を建てるよう、残したことによる。Gagliardi, *op. cit.*, p. 25.

<sup>31</sup> 後に聖堂はバロック様式に改装されたため、現在はクリヴェッリの頃の内装とかなり異なると考えられる。なお、《受胎告知》はナポレオンのイタリア侵攻時に、コミッショナーを通じて接收され、ミラノへ運ばれた。ナポレオン接收に関する記録は、Archivio di Stato di Modena, *Archivio private Bocolari*, filza 9, mazzo 53.

<sup>32</sup> ‘1482, X a aprilis, monace Sancte Marie, monace Heremitatum ordinis, fuerunt extracte a loco Annunziata Gruptarum et dictus locus fuit datus fratribus Observantie ordinis Minorum Sancti Francisci, propter celebrationem cuius diei (quia eo die, videlicet in die Annunziata, declarata et publicata fuit supradicta libertas) decreto publico ordinatum fuit, ut sindici et viri omnium oppidorum, vicorum agri Asculani et omnes artes civitatis annuatim venirent ad offerendum cereos in die illo ecclesie Annunziata ad perpetuam memoriam dicte libertatis.’ 「上述の自由」とは、註22の1482年3月25日の記述を指す。Salvi, *op. cit.*, p. 41.

チ<sup>33</sup>が、念願の自由を手にしたことを覚えておくために提案した内容は、次の通りである<sup>34</sup>。受胎告知の日を含む 9 日間、街路を明るく照らし、祭りの為に町を訪れた、重罪人を除くすべての人を受け入れる。そして司教にできる限り立派な祝祭行列を行うよう求め、司教座聖堂参事会員、聖職者、議員ら町の要人、同業者組合、そして町の各地区の代表者らが、町の最も大きな祝祭である聖エミディウス祭<sup>35</sup>のように、蠟燭を持って行列に参加する。大きな地区からは 8 人、小さな地区からは 2 人ないし 4 人の代表者を選出し、代表者は地区から蠟燭のための献金を集める。さらにアスコリ・ピチエーノ周辺の住人達にも祝祭に参加するよう呼びかける。以上の提案は議会で、満場一致で可決された。

司教が実際に何年から行列を行ったかは分かっていないが、町でペストが流行した 1486 年にはペストの感



図 8 現在のポーポロ広場。左の建物が  
カピターニ・デル・ポーポロ宮殿（筆者撮影）

染を避けるために、人の集まる行列は中止されていることから、1486 年までにはサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂への行列が、町の行事として成立していたと言える<sup>36</sup>。もしアンゲルッチが提案したように、聖エミディウス祭と同じように行列が行われたのであれば、行列はカピターニ・デル・ポーポロ宮殿（図 8）もしくは司教座大聖堂を出発し、聖書の朗読が聞こえる中、蠟燭を手にとり町のあらゆる通りを人々が練り歩いた後、サンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂への坂を登り、丘の上の聖堂に蠟燭を捧げたと考えられる<sup>37</sup>。そしてその行列には身分や場所を問わず、多くの人々が訪れたことが窺える。

行列のたどり着く先であったサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂の祭壇画には、行列の目的にかなった、つまり教皇からの自由をいつまでも思い出せる祭壇画が望ましかったであろう。《受胎告知》は、「LIBERTAS ECCLESIASTICA」を聖書の物語とともにうまく画像化し、思い起こさせるような構成であったので、祝祭のために聖堂を訪れた人々にとっては、念願の自由獲得を覚えておくという祝祭の目的を十分に果たすものであった。

祝祭に相応しいように計算されたのは構図だけではない。画面に散りばめられた装飾的な数々のモチーフもまた、祝祭という場に相応しいように選択されたと考えられる。

このことは、クリヴェッリが 1482 年に制作していた《大天使ガブリエル》（図 9）と《お告げを受ける乙

<sup>33</sup> ピエルサンテ・ディ・アンドレア・アンゲルッチについては、Fabiani, *op. cit.*, (1950), p. 189.を参照。彼は 1455 年から 1519 年頃まで活動した金銀細工師の親方であり、アスコリ・ピチエーノの貨幣製造場の親方でもあった。「LIBERTAS ECCLESIASTICA」承認に関する交渉の際、シクストゥス 4 世へ派遣される 14 人の市民リストに名を連ねている。

<sup>34</sup> 審議の内容については次の文献を参照。Giorgi, *op. cit.*, pp. 59-60.

<sup>35</sup> 守護聖人聖エミディウスの祝日は 8 月 5 日である。聖エミディウスの祝祭は 7 月 29 日から 8 月 12 日までの 15 日間行われた。Fabiani, *op. cit.*, (1950), pp. 233-239.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 167.

<sup>37</sup> アスコリ・ピチエーノが制定した 1378 年法規集に、「アスコリの民とコムーネの保護者、守護者にして擁護者、聴罪者で殉教者である聖エミディウスの祝祭」の内容が定められている。それによると、聖エミディウス祭の前夜に行われていた蠟燭行列は次のように記されている。12 の同業者組合の名による 12 本の大蠟燭と、コムーネから寄贈されたさらに大きく豪華な蠟燭を捧げるため、長老会員、議員、行政官らは同業者組合とともに火をともした蠟燭を手にとりカピターニ・デル・ポーポロ宮殿を出発し、市民とともに町の大通りを練り歩いた後、大聖堂の入り口で司教と司教座聖堂参事会員らに迎え入れられる。L. Zdekauer e P. Sella (a cura di), *Statuti di Ascoli Piceno dell'anno 1377*, Roma: Forzani e C. tipografi del Senato, 1910, pp. 321-323; Fabiani, *op. cit.*, (1950), p. 239.





図9 カルロ・クリヴェッリ、《大天使ガブリエル》、1482年、板にテンペラ、54×38cm、フランクフルト、シュテーデル美術館



図10 カルロ・クリヴェッリ、《お告げを受ける乙女マリア》、1482年、板にテンペラ、54×38cm、フランクフルト、シュテーデル美術館

女マリア》(図10)と比較すると一層明らかになる<sup>38</sup>。  
《お告げを受ける乙女マリア》でマリアは質素な部屋の中でお告げを受けていたが、《受胎告知》では豪華で装飾的な家へと変更され、部屋に置かれた寝具やカーテンには金色の刺繍が施された。家の二階部分に掛けられた絨毯もより色鮮やかで煌びやかな文様を有し、その隣には非常に目を引く存在である孔雀が登場している<sup>39</sup>。また窓から緩やかに差し込んでいた神の光は、天

からの強烈な光線となって乙女マリアの部屋へ差し込むようになった。これらの装飾は、より華やかで祝祭に相応しい作品になるように付加されており、そして天からの光線はより超自然的で観者の目を引くように変更されたと考えられる。

また町を練り歩いた後に観るお告げの場面が、同時代の人々が行き交う町の中で練り広げられていることで、観者は祭壇画と現実との繋がりをより感じたので

<sup>38</sup> マルケ地方西部の町カメリーノのサン・ドメニコ聖堂のために制作した多翼祭壇画の二パネル。現在この多翼祭壇画は、パネルごとに分解され《聖ペテロと聖ドメニコ》、《聖母子》、《殉教者聖ピエトロと聖ベナンツィオ》、《隠修士アントニウスと聖ヒエロニムス、聖アンデレ》、《聖ヤコブとシエナの聖ベルナルディーノ、聖ニコデーモ》はミラノのブレラ絵画館に、《大天使ガブリエル》と《お告げを受ける乙女マリア》はフランクフルトのシュテーデル美術館に、《キリストの復活》はチューリヒの個人コレクションに所蔵されている。この祭壇画の分解及び輸送については、上原真依、「19世紀イタリアにおける美術品流通——カメリーノ由来のカルロ・クリヴェッリ作祭壇画をめぐって——」、『鹿島美術研究』年報第29号別冊、pp. 418-428。

<sup>39</sup> 受胎告知図における孔雀の意味については、解釈が分かれるところである。例えばアウグスティヌス『神の国』第21巻第2節で孔雀の肉が腐らないと伝えられていることから、腐ることのない「マリアの肉体」「不死」の象徴としたり、プリニウス『博物誌』第10巻22に孔雀は春になると毛が生え替わると記されていることから、「復活」の象徴とするなど、様々な解釈がある。孔雀の図像解釈とその変遷については、F. Ravera, "Il simbolismo del pavone e i suoi sviluppi in epoca tardogotica", *Arte cristiana*, vol.735, 1989, pp. 427-450. なお筆者は、《受胎告知》における孔雀は、画家の故郷であるヴェネツィアの図像伝統を踏まえていると考えるが、紙幅の都合上この点については別紙に譲るとしたい。

はないだろうか。実際、《受胎告知》の町並みは大幅に理想化されているものの、城壁や建築材にはアスコリ・ピチェーノでも一般的だった煉瓦を確認できるのである。さらにアーチの上やマリアの家に掛けられた絨毯は、有力者を迎える際や祝日に、美しい絨毯を窓やバルコニーに掛けて道を飾った風習と関連しており、おそらく現実の祝祭と共通する要素として作品に付加されたものであろう<sup>40</sup>。町の政治的状況を受けて定められた祝祭は、《受胎告知》の中の世界と共感できる場だったと思われる。祝祭のために聖堂を訪れて作品を観た人々が、念願の自由を獲得したことを思い出す助けとなれば、《受胎告知》は祝祭の目的を十分に果たしたと言える。そして画面の煌びやかな装飾は、“LIBERTAS ECCLESIASTICA”のお祝いムードを一層高めることができたであろう。

ただ、このような装飾的要素の中でも特に、乙女マリアの家の存在感は突出しているように思われる。乙女



図11 サンタ・カーザ、外装部は1538年、ロレート大聖堂（筆者撮影）

マリアは大天使より、家の外から窓越しにお告げを受けており、この両者の距離感が家、特に画面ほぼ中央にそびえる壁の存在を目立たせている。従来の受胎告知の図像伝統においては、天使とマリアの間に円柱が置かれることこそあれ、このような両者をはっきりと隔てるような壁がある例は他に見ることができない。しかしクリヴェッリは1482年の《大天使ガブリエル》(図9)《お告げを受ける乙女マリア》(図10)においても、《受胎告知》と窓越しのお告げを実現させており、お告げというテーマに画家が進んで採用したモチーフであることが窺える。今の私たちにとっては少々奇妙にも思える窓越しのお告げという形を、なぜクリヴェッリは選択したのだろうか。

#### 第4章 窓越しのお告げとサンタ・カーザ

クリヴェッリの受胎告知図における壁、もしくは窓の存在については、先行研究でほとんど説明されてこなかった<sup>41</sup>。本章では、クリヴェッリが窓越しのお告げを描くに至った理由を、当時のマルケ地方における宗教的風土、とりわけ巡礼地サンタ・カーザへの崇敬から考察する。

##### 4-1. ロレートの巡礼地サンタ・カーザ

マルケ地方中東部の小都市、ロレートは今なお巡礼地として名高く、巡礼者が後を絶たない。巡礼の目的地は町の大聖堂の内部にある、サンタ・カーザ（聖なる家）である（図11）。大聖堂の中央に立つサンタ・カーザは、現在はユリウス2世によって建造が始められた大理石製の外装に覆われている。この外装は壁龕の彫刻や付け柱で装飾されており、壁面には聖書の場面のいくつかが浮き彫りされている。大理石の外装の豪華さとは対照的に、内側から確認できるサンタ・カーザ本体は、砂岩と煉瓦づくりの小さな建物で、繰り返し補強が加えられてきた。この質素な砂岩の壁こそ、乙女マリアが生まれ育ったナザレの家の壁として、今なお多くの巡礼者を集めている。

<sup>40</sup> P. P. Scotucci, “Arazzi, tappeti, tessuti d’arredo: tipografia, fortuna ed uso nella festa mediavale”, *Segli, simboli, spazi e colori della festa mondana medievale*, Ascoli Piceno: Ente Quintana, 1996, pp. 63-74. なお、現代イタリアにおいても宗教行列の際に、住宅の窓から旗や赤い布を垂らす習慣を確認できる。

<sup>41</sup> 確認できた中では、トーマス・ゴルセンヌが、シエナの聖ベルナルディーノの説教と関連付けて、乙女マリアの家に言及している。彼によると、クリヴェッリは「容器」としてのマリアの象徴である宮殿の中に、「内容」であるマリアを配置したため、閉じられた家が描かれたのだとしている。Golsenne, *op. cit.*, pp.160-161.



オリジナルのサンタ・カーザとされるのは、祭壇のある東面をのぞいた三方の壁面の下部約 3 メートル部分で、ナザレ産と言われる砂岩のブロックでできている<sup>42</sup>。オリジナルの壁の上部は、地元産の煉瓦で補われている。後補の内壁面は、14 世紀リミニ派によるフレスコ画で装飾されているが、下方のオリジナルの壁は砂岩ブロックを積み上げた面が露出している。西面には、13 世紀に作られたとされる磔刑図が飾られており、その下に現在「天使の窓 *finestra dell'Angelo*<sup>43</sup>」と呼ばれる窓が存在する (図 1 2)。

天使の窓について述べる前に、まずサンタ・カーザがなぜ巡礼地として今も信者を集め続けているのか、簡単にその伝説を紹介しておこう。サンタ・カーザの伝説は、文献によって多少の違いはあるものの、要約すると次のようなものである<sup>44</sup>。

ナザレにあった乙女マリアの家は、三面の石造りの壁面と岩をくりぬいた洞窟からできており、そこでマリアが生まれ育ち、天使よりお告げを受け、イエス・キリストを育てたとされている。1291 年 5 月 9 日の夜、乙女マリアの家の三壁面は天使の手によってフィウメ近くのテルサットへ移り、さらに 3 年後の 1294 年 12 月 10 日、ロレート近郊の森の中へ飛来した。(以下、乙女マリアの家の三壁面を指してサンタ・カーザと呼ぶ。)

ロレートの森の中に奇跡的に移転したサンタ・カーザは、多くの巡礼者でにぎわったが、巡礼者を狙って強盗が後を絶たなかった。そこで 1295 年 7 月から 8 月頃、心を痛めた天使が再びサンタ・カーザを持ち上げ、レカナーティ近郊モンテ・ブロードに住む兄弟の土地に下ろした。しかし今度はこの兄弟が供物の取り分を巡って争ったため、1295 年 12 月 2 日再び天使が現れてレカナーティからアドリア海へと続く公道上まで聖



図 1 2 サンタ・カーザ内部、西壁面、ロレート大聖堂

堂を運んだ。これが現在のサンタ・カーザの場所である。サンタ・カーザが壁面だけでできており、基礎がなかったことを心配したレカナーティ市民らは、オリジナルの壁を煉瓦の壁で補強した。

しかし、これは現在伝わっているものであり、伝承とは当然のことながら何世紀もの間に変化したり、付け加えられたりするものである。クリヴェッリとの関連を述べるためには、彼が活動した 15 世紀後半、ロレートのサンタ・カーザがどう捉えられていたのかを検討しなくてはならない。

14 世紀の作家、フランコ・サケッティは著書『三百話』の中で、アドリア海沿岸の都市チヴィタヌオーヴァの漁師の説話を取り上げている。この中で、マルケ地方の漁師マウロは、寝台で妻が蟹に挟まれているのを見て驚きのあまり、「ああ、ロレートの聖マリアさま！<sup>45</sup>」と叫び声を挙げる。『三百話』は 1392 年頃書き始められたとされているので、14 世紀末には、一介の漁師が思わず叫ぶ時にその名を挙げるほど、ロレートの聖マリアがこの地域で浸透していたと言えよう。また、14 世紀後半にはレカナーティやロレートなどのマルケ地方の各地で、ロレートの聖マリアへの献金の記録が残っている<sup>46</sup>。15 世紀にはロレートの聖マリアへの崇敬

<sup>42</sup> 1962-1965 年に行われた考古学調査により、オリジナルの壁がロレート周辺にはない砂岩でできていることが明らかになった。また、オリジナルのサンタ・カーザが基礎を持っていないこと、かつては公道上に立てられていたこと、東の壁面は煉瓦作りでオリジナルは半円形をしていたこと、現在の大理石製の外装の前にも別の外装が作られていたことが明らかになっている。F. Grimaldi, *Loreto: Basilica, Santa Casa*, Bologna: Edizioni Calderini, 1975, pp.115-116; Lightbown, *op. cit.*, p.39.

<sup>43</sup> Grimaldi, *op. cit.*, pp.115-116.

<sup>44</sup> *Ibid.*, pp. 115-116; A. A. Amadio, "I santuari mariani", *Il volto di Maria: immagini della madonna nelle Diocesi del Piceno*, Ortona(CH): Menabò, 2004, pp. 178-181.

<sup>45</sup> "Per Santa Maria de l'Oreno!" ファッチョーリの註によると、Per la Madonna di Loreto! のこととある。F. Sacchetti, *Il trecentonovelle: a cura di Emilio Faccioli*, Torino: Giulio Einaudi editore, 1970, pp. 632-636.

<sup>46</sup> 次の文献にその一覧が記されている。C. U. Chevalier, *Notre-Dame de Loreto: étude historique sur*

は広まり、多くの人が巡礼に訪れるようになった。その巡礼者の中には、カルロ・クリヴェッリが1482年に多翼祭壇画を制作した都市カメリーノの領主も含まれていた。さらにクリヴェッリが活動の拠点としていたアスコリ・ピチェーノ周辺においても、15世紀にはロレートの聖マリアが知られていた記録が残っている。例えば、アスコリ・ピチェーノの年代記には、1451年にロレートの聖マリアに関する言及が見られる<sup>47</sup>。ロレートの聖マリアの祝祭日と記すだけではあるが、1450年頃にはマルケ地方南部においても、ロレートの聖マリアの存在は知れ渡っており、聖マリアの誕生を記念する9月8日をロレートの聖マリアの日としていた。

サンタ・カーザつまりマリアの家に関する詳しい記述は、15世紀中頃から現れ始める。1438年2月15日、チンゴリの助任司祭は、神を冒瀆した男に対して、懺悔のために「一度ロレートの聖マリアの、聖なる家を実際に訪ねる<sup>48</sup>」よう命じている。さらに、1472年頃、ロレートの聖堂の主任司祭であったピエロ・ディ・ジョルジョ・トロメイ<sup>49</sup>は聖堂に関する報告書の文頭で、次のようにサンタ・カーザのことを記した。

「ロレートのマリア聖堂は、私たちの主イエス・キリストの母、乙女マリアの家であった。その家はユダヤの地エルサレムに、そしてナザレという名のガリラヤの町にあった。この部屋で乙女マリアは生まれ、そこで育てられ、そして天使ガブリエルによって挨拶をされたのである<sup>50</sup>」

(傍線部筆者)

ピエロ・ディ・ジョルジョ・トロメイがロレートの聖

堂の報告書を残した頃、すでにサンタ・カーザはマリアが告知を受けた場所として認識されていたと言える。ちょうどクリヴェッリがマルケ地方で活動した15世紀後半は、ロレートへの巡礼熱が高まり、サンタ・カーザはマリアが天使よりお告げを受けた場所であると考えられるようになっていた。1507年には教皇ユリウス2世が、サンタ・カーザを聖母マリアが生まれ、お告げを受け、使徒によって最初の聖堂として聖別され、初めてミサが唱えられた地として認め、天使の手によりロレートに運ばれたことに言及して、受胎告知の祝祭での贖宥を認める勅書を発布した<sup>51</sup>。

#### 4-2. 「天使の窓」と《受胎告知》

続いてカルロ・クリヴェッリの受胎告知図との関連を探るため、サンタ・カーザが当時どのような様子であったのか、特にサンタ・カーザの窓がどのように捉えられていたのか見てみよう。

サンタ・カーザの様子については、クリヴェッリの活動時期よりも少し遅くなるが、ジャック・ル・セーニュの巡礼記録から知ることができる。フランス北部の町ドゥエーの絹織物商人であったジャック・ル・セーニュは、1518年5月9日から12日にかけて、ロレートとロレートの伝承に関連した地域を巡礼し記録を残した。1日目の記録は彼が初めて訪れた大聖堂の様子を伝え、2日目の記録では再び訪れた大聖堂で、サンタ・カーザの中を見ることができたと伝えている。

(5月9日の記録)

「私たちは教会の中に入り、かつては部屋であった礼拝堂を見に行った。その部屋で乙女マリアは、受胎という聖なる知らせを受け、そして彼女

*L'authenticité de la santa casa*, Paris: Alphonse Picard & Fils Libraires, 1906, pp. 168-175.

<sup>47</sup> Salvi, *op. cit.*, p.29.

<sup>48</sup> “semel Domum sacratissimam Sanctae Mariae de Laureto corporaliter visitare”. Chevalier, *op. cit.*, p. 180.

<sup>49</sup> ピエロ・ディ・ジョルジョ・トロメイ(通称テラマーノ)は、少なくとも1437年にはロレートの聖堂に勤めており、1450年か1454年から、1473年に死亡するまで主任司祭を務めた。彼の報告書は、ラテン語版だけでなくイタリア語版(1472年5月)ほか各国語翻訳版が出版され、広く普及した。またこの報告書の中で初めて、現代にも残るサンタ・カーザの奇跡的転移に関する記述が見られる。ただしサンタ・カーザの移動した年代は、1525-31年頃になってレカナーティ政庁書記官ジローラモ・アンジェリータによる報告書で補足された。*Ibid.*, pp. 210-214.

<sup>50</sup> *Ibid.*, p.210. “Ecclesia Beatae Mariae de Loreto fuit Camera Domus Beatae Virginis Mariae, Matris Domini nostri Jesu Christi, quae Domus fuit in partibus Hierusalem Judeae, et in civitate Galileae, cui nomen Nazareth. In dicta camera fuit Beata Virgo Maria nata, et ibi educata, et postea ab Angelo Gabriele salutata.” (傍線部筆者)

<sup>51</sup> *Ibid.*, pp.257-268.



の息子イエスは 12 歳までその部屋で育ったのである。周りの壁は煉瓦でできており、三方に煉瓦の壁がある。見たところその壁の横幅はおよそ 15 ピエ(約 4.86m)、長さはおよそ 28 ピエ(約 9.07m)、高さはおよそ 15 から 16 ピエ(約 4.86m から 5.18m)であった」(中略)

(5月10日の記録)

「私たちは一人の教会参事堂会員に会ったが、彼にはバランシェンヌで瀕死の妹がいた。同郷のよしみで、彼は私たちに、そこを通って素晴らしい知らせを告げに天使がやってきたという、窓を見せてくれた。そして聖なる部屋の中にある、装飾のない祭壇も見せてくれた。そして私たちに、使徒達がエルサレム内にこれを作り、聖小ヤコブがミサを唱えた、最初の人であり、それがこの世で最初のミサであったと教えてくれた<sup>52)</sup>

(括弧内及び傍線部筆者)

この記録からわかるように、1518年には、ロレートを訪れた巡礼者は、サンタ・カーザの窓を、天使がお告げをするために通った窓であると説明を受けていた。これが現在でいう「天使の窓」であり、外装がついた今も信者席から見えやすい形で示されている(図13)。サンタ・カーザ内の様子、特に窓について言及した記録は他にあまり多く見られないが<sup>53)</sup>、ジャック・ル・セーニュの窓に関する記述は、天使のお告げに、西面の窓が関係していたことをよく伝えている。また現在も残るサンタ・カーザの外装が作られた際、浮き彫り装飾を担当したアンドレーア・サンソヴィーノは、レオ10世か

ら《受胎告知》と《生誕》のレリーフを注文され、サンタ・カーザ外装西壁面の窓の上部にまず《受胎告知》のレリーフを完成させた<sup>54)</sup>。マリアの生涯の様々な場面の中から、特にサンタ・カーザに関連する受胎告知と生誕の場面が最初に選択されており、受胎告知のレリーフは現在でいう「天使の窓」の上部に置かれた。

すなわち、現在わかっている記録によると、次のように言える。マルケ地方で14世紀より聖なる地として有



図13 サンタ・カーザ外装、西壁面、ロレート大聖堂(筆者撮影)

<sup>52)</sup> *Ibid.*, pp. 287-290.に収録された引用を参照した。” Nous venus en l’église allasmes veoir une chappelle qui estoit le chambre ou la vierge Marie recheut les saintes nouvelles comment elle concheveroit; et se y fut noury son enfant Jesus l’espasse de douze ans. Les murs d’alentour sont de bricques et y a trois bricques d’espes, et a de largeur la dite chambre par dedens environ quinze pieds et de longueur environ vingt huit pieds et de hauteur quinze a seize pieds.(...)”

“Le trouvasmes ung chanoine, lequel avoit sa soeur demourante a Valenchesnes et pour l’amour du pays nous monstra le fenestre par ou l’angele vint anochier les belles nouvelles. Et nous monstra le autel tout nud, qui est en la sainte chambre. Et nous dict que le apostles l’avoient fait dedans Hierusalem, et que saint Jacques le mineur fut le premier quy y dit messe, et fut la première messe dicte en ce monde.” (傍線部筆者)

<sup>53)</sup> 時代は大分異なるが、1797年にナポレオンに送られた報告書では、サンタ・カーザが図示され、西面の窓を「天使が通ったと言われる窓」fenestre par où l’on dit que l’ange passa」と記している。Grimaldi, *op. cit.*, p. 118.

<sup>54)</sup> 教皇ユリウス2世の提唱で、当初はブラマンテが手がけたが、1513年よりアンドレーア・サンソヴィーノが制作及び現場監督にあたった。G. H. Huntley, *Andrea Sansoino: sculptor and architect of the Italian Renaissance*, Cambridge: Greenwood Press, 1935, pp. 68-70, pp. 114-115.

名だったロレートは、15世紀になると多くの巡礼者が訪れるようになった。大聖堂内部にあるサンタ・カーザは崇敬を集め、特に15世紀中頃には、乙女マリアが誕生し、育ち、お告げを受け、イエスを育てた家であると考えられるようになった。そして1518年には、西側の窓がお告げをするために大天使ガブリエルが通った窓であると言われるようになった。

カルロ・クリヴェッリが活動した15世紀後半、すでにサンタ・カーザは、乙女マリアがお告げを受けた場所であることは広く世間に知られていた。つまり、《受胎告知》が制作されたのは、お告げと窓が結びつけられ始めた時期にあたる。クリヴェッリは、直接あるいは間接的にサンタ・カーザのことを知り、お告げと窓を関連させて作品に取り入れたのではないだろうか。先述したように《受胎告知》は町の歴史的な出来事と、それを記念する祝祭と強く結びついているため、同時代の町の中で聖書の物語が展開されることが望ましかった。町の中でのお告げという、構図に工夫が必要な主題に取り組む際、すでに巡礼地として知られていたサンタ・カーザを思い出し、構想に組み込んだ可能性は高いように思われる。また、すでにサンタ・カーザが巡礼地として有名になっていたため、《受胎告知》を見た当時の人々も、窓越しのお告げにそれほど違和感を覚えなかったであろう。

## おわりに

クリヴェッリの《受胎告知》は、舞台装置の複雑さや登場人物の多さ故に、現代の私たちには煩雑な作品という印象を与えかねない。しかし作品が制作された背景と、展示状況、そして地域独特の信仰を検討すると、本作品が当時のアスコリ・ピチエーノの人々にとって、非常に身近で、同時に重要な祭壇画であったことが浮かび上がるのである。華麗な《受胎告知》は、まさに、聖書の物語だけでなく、アスコリ・ピチエーノが誇るべき“LIBERTAS ECCLESIASTICA”の獲得を、祝祭の場に相応しい形で、かつ宗教行列の参加者にも分かりやすい形で示すために、展示空間と周辺の地域性を考慮した上で、入念に仕上げられた作品だった。